

豆を煮て、汁をおぼくしすこし餅を入れて、節々まつり候を、神在もちひと申よし云々いへり、此事懷橘談大社のことをかける條にも云す。されど、大筑波集に、出雲への留主もれ宿のふくの神とあれば、古きいひ習はしと見ゆ、また神在餅は善哉餅の訛りにて、やがて神無月の説に附會したるにや、尺素往來に、新年の善哉は、是修正之祝著也とあり、年の初めに餅を祝ふこと、聞ゆ、善哉は佛語にてよろこぶ意あるより取たるべし、鷹筑波集よきかなや影もせんざいもち月夜、これ善哉を音訓ともに用たり、後撰夷曲集に、大納言の小豆ににたる物なれば、せんざい餅はくぎやうにて喰へ、貞徳一休物語、或人一休といふ名の由を聞いて、歌よむを一休きこしめし、善哉々々とて虎餅ついてよろこび給云々、貞徳が淀川に、毗アシしむ時、尻これ善哉餅をあやなして書たるなり、赤小豆をこし粉にせざる汁こ餅と見えたり、又洛陽集に、日蓮忌御影講や他宗のうらやむせんざい餅高成今は赤小豆の粉をゆるく汁にしたるを、汁粉と云ども、昔はさにあらず、すべてこといふは汁の實なり、寛永發句帳に、名月幸名芋の子もくふやしるこのもち月夜、又油かすに握られん物かやたゝはおくまじや、しるこの餅は箸そへてだせ。

〔鹿苑日錄〕慶長十二年正月四日、齋了出落先至豊光會席、蔭軒、龍伯、玄室、斯英、川岳瑞雲光駕予亦備其員、夕食了テ及申尾喫善哉餅又賜酒沈醉シテ歸院、

〔守貞漫稿生業六六〕善哉賣

京坂ニテハ、專ラ赤小豆ノ皮ヲ去ズ、黒糖ヲ加ヘ、丸餅ヲ煮ル、號テ善哉ト云、
汁粉賣

江戸ハ赤小豆ノ皮ヲ去リ、白糖ノ下品或ハ黒糖ヲ加ヘ、切餅ヲ煮ル、號テ汁粉ト云、京坂ニテモ皮ヲ去リタルハ汁粉、又ハ漬餡ノ善哉ト云、又江戸ニテ善哉ニ似タルヲツブシャンント云、又マシ粉アンノ別ニ全體ノ赤小豆ヲ交ヘタルヲイナカ鄙汁粉ト云、或ハ八重成アリ、八重成ハ小豆ニ似テ碧色